

振り返る

平成16年12月27日 円山川緊急治水対策 事業の採択

国は、台風23号で堤防が決壊した円山川と出石川下流部の治水対策事業を採択しました。同規模の豪雨が降った場合でも再び同じ災害を繰り返さないため、平成16年から10年間に約900億円を投じて、河道整備や築堤、内水対策、堤防強化などの事業が緊急的かつ集中的に行われることになりました。

平成17年5月30日 災害ごみの処理完了

旧1市5町では、台風23号による浸水等により約36,000トンの災害ごみが発生しました。10カ所の集積場のうち最後まで災害ごみが残っていた豊岡中核工業団地仮置



最後の災害ごみを積み込んだトラックを見送る

災害ごみの量

地域	総ごみ量
豊岡	25,519 t
城崎	1,249 t
竹野	11 t
日高	5,767 t
出石	3,351 t
但東	126 t
計	36,023 t

復興の足跡 1年間の主なできごと

場所からの搬出作業を終え、新市すべての災害ごみの搬出処理が約7カ月かけてようやく完了しました。処理に要した経費は約11億円にものぼりました。

6月

円山川・出石川の決壊現場が復旧

円山川緊急治水対策事業の一環として、出水期に入る6月15日までに円山川（立野地区）と出石川（鳥居地区）の決壊現場において復旧護岸工事が完了しました。



復旧工事が完了した鳥居地区

6月～9月

各地で水防訓練

本格的な台風シーズン控え、各地域で水防訓練が開催されました。台風23号の教訓を踏まえ、消防団と自主防災組織の皆さんは、お互いの役割を確認しながら、気を引き

8月1日

台風23号浸水実績図を作成



円山川ではヘリコプターを使って一番さながらの救出訓練が行われた

締めて土のう積みや非常食の炊き出しなどさまざまな訓練に取り組みました。また、9月2日には、市消防本部が県消防防災航空隊と合同で、水害時を想定した救出訓練を行いました。

国土交通省豊岡河川国道事務所が、地域の皆さんの日ごろの浸水対策に役立ててもらおうと円山川下流域を対象にした台風23号出水の浸水実績図を作成しました。浸水被害

10月20日

豊岡市災害復旧・復興対策本部を解散

災害から1年を経過し、台風23号に伴う災害復旧・復興対策本部を解散しました。今後は、気持ちを新たに、新市のまちづくりの中で復旧・復興を進めていきます。



浸水実績図では地図が水害体験を語っている

を受けた地域の範囲や浸水深のランクが地図上に表され、当時の気象概要や出水状況も併せて掲載されています。ご希望の方は、総務課消防防災係および各支所総務課まで申し出てください。

避難勧告の状況(11月15日現在)

地域	地区	戸数	人数
豊岡	三江	8戸	28人
	五荘	4戸	15人
	新田	14戸	60人
日高	三方	6戸	19人
計		32戸	122人

災害に強いまちづくりに向け 誓いを新たに

台風23号被災者追悼の集い

祈る

10月20日、日高文化体育館で、台風23号で市内において犠牲になった7人の方を追悼する「台風23号被災者追悼の集い」が開催されました。遺族をはじめ関係者約100人が集まり、黙祷を捧げ、献花を行い冥福を祈りました。

妻を亡くした周藤和正さん(日高町野)が、「まだまだいっぱいやりたいことがあった皆さんの命を奪った台風23号が憎くてしかたありません。もう二

度と同じような悲劇が起こらないことを祈ります」と遺族を代表して遺影に語りかけると、会場からはすすり泣きの声があがりました。

また、主催者を代表して追悼の言葉を述べた中貝市長は、「大切な命を市民全員で守ることのできる、災害に強いまちを創りあげてを誓います」と決意を新たにしました。



遺影の前に手を合わせる遺族



遺族は白いハンカチを握り締め、あふれ出る涙をふいていた



犠牲となった7人の遺影を前にして行われた「台風23号被災者追悼の集い」

豊岡市内における台風23号による被害状況

地域	人的被害(人)			住家被害(世帯)					
	死者	行方不明者	負傷者	全壊	大規模半壊	半壊	一部損壊	床上浸水	床下浸水
豊岡	1	---	46	396	866	2,358	200	309	2,394
城崎	---	---	---	1	6	148	21	137	348
竹野	---	---	---	---	---	---	11	5	23
日高	2	---	3	64	143	287	8	66	475
出石	2	---	2	62	83	137	21	55	149
但東	2	---	---	7	6	13	31	15	154
合計	7	0	51	530	1,104	2,943	292	587	3,543

防災シンポジウム

防災・減災対策と災害文化の伝承

考える

基調講演
「災害文化を伝承する」

記録が伝承になり、生活の知恵となる このことが災害文化の伝承



信州大学人文学部教授
笹本正治さん

被害事実を未来に伝え
次の災害に備える

地球温暖化が進む中で、日本ではなく、世界レベルの災害がやって来る可能性があります。もう一度、私たちは過去を振り返り、災害に対応する術を学ぶ必要があります。しかし、大地震などの大災害ばかり見ていると足元をすくわれます。まず地域において、火事、自動車事故、風水害など、身近な災害から身を守ることを考えてください。そのために、台風23号の経験を自分たちのものにし、未来に伝え、地域がもつとよくなるための材料にできるかが皆さんに与えられた課題です。

水害の地であること
忘れがちに!?

豊岡は、さまざまな文献に記されているように、かねてから水害の地として有名でした。それでも、よい場所だから、皆さんの先祖はこの地に住み続けてきました。

明治以降、円山川等の治水事業の進捗により水害が減少しました。ややもすると近代化の中で水害を忘れがちになつていたのではないのでしょうか。

水害の危険性を伝えるため
伝承の掘り起こしを

水害の地を裏付ける伝説やことわざは、この地にたくさんあります。近年、こうした伝承が非科学的であるという理由から消えようとしていきます。伝説やことわざには、先人からのさまざまな警告が秘められています。我々は、水害の危険性を後世に伝えるために、再度、伝承を掘り起こ

し伝えていかなければなりません。

水の大切さも伝える

また、一方で水の重要性も伝える必要があります。水に恵まれているからこそ水害にも遭うのです。

豊かな水と自然環境の中で、コウノトリとの共存を目指す豊岡において、水害とは何なのか、自然とは何なのか、全国に、世界にメッセージを発信してほしいと思います。

記録をすることが
災害文化の継承につながる

人間の記憶は実にあやふやなもので、どんな大災害でも時間の経過とともに忘れ去られてしまいます。

従って、台風23号に関してどんなことでも記録し、文字として残すことが大切です。それが、いつしか伝説やことわざとなり、最後には生活の知恵となつて、次の世代が恩恵を受けることとなります。

これが災害文化の継承です。

皮膚感覚で自然を感じる

人間は自然の一部ですが、その人間が自然から離れようとしています。自然から離れば離れるほど災害に対する危機意識からも遠ざかっています。人間は進歩しているといいつながら、大事な部分を忘れていくように感じます。今一度、皮膚感覚で自然を感じる大切ではないでしょうか。

地域を知ることが災害文化
の伝承につながる

皆さんの中にも、東京や大阪、外国のことはよく知っていても、豊岡のことを知らないという人が案外いるのではないのでしょうか。

災害文化を伝承するためには、皆さんが豊岡のことを知り、それ以上に集落のことを知ることが大切です。それがまた地域に対して誇りを持つことにもつながっていきます。



安森神戸新聞但馬総局長の進行によって行われたパネルディスカッション

10月22日、出石文化会館(ひぼこホール)で、「防災・減災対策と災害文化の伝承」をテーマにした防災シンポジウムが開催されました。台風23号水害を教訓にして、防災・減災に関する対策と災害を一つの文化として後世に永く伝承するためのきっかけづくりとして、基調講演やパネルディスカッションが行われました。約300人の聴衆は、パネリストの意見に耳を傾け、災害について思いをめぐらせていました。

パネルディスカッション「防災・減災対策と災害文化の伝承について」

自然環境に配慮しながら防災対策を
自然の脅威と人の温もりを伝えたい
地域の特性を受け入れ防災を考える

足立敏之さん
中村明子さん
中貝宗治市長



中貝宗治市長

今月に市内全小中学校で実施した防災授業では、子どもたちにこうした地域性を伝え、その上で自分の身をどのよう
に守つたらよいかを自ら考
えてほしいと思います。
コミュニティにおいては、
普段から近所間の交わりを強
めていただきたいと思います。
その交わりの中で、防災・減
災に関する知恵が災害文化と
して伝わっていくと思います。



豊岡市出石消防団部長
中村明子さん

中貝 円山川は、勾配がゆる
く洪水が起きやすい川です。
しかし、こうした川には湿地
がいくつかあり、カエルやド
ジョウなどがいて、コウノト
リが育まれてきました。また、
コリヤナギが自生し、江戸か
ら明治にかけて国内最大の柳
行^{ヤナギ}の産地として栄えました。
良いことも悪いことももたら
す円山川の特性を、私たちは
まず受け入れる必要があります。
す。



国土交通省近畿地方整備局企画部長
足立敏之さん

足立 地域の防災力を支える
のはもちろんコミュニティや
ボランティアの皆さんですが、
地域の建設業の皆さんも重要
な役割を果たします。台風23
号においては、夜を徹して復
旧作業にがんばってもらいま
した。そんなところにも目配
りをしていただければありが
たいです。

国では、平成16年度から10
年間にわたって円山川緊急治
水対策事業に取り組みことに
しています。河道掘削におい
ては、河川敷を掘って湿地を
生み出すなどの工夫を行い、
コウノトリと共生できる環境
を創出します。今後、皆さ
んともによりよい自然環境
をつくっていきたくと考えま
す。

中村 出石地域では、台風23
号以降、出石川が決壊し水が
押し寄せたらどれくらいの水

位になるかを想定した電柱へ
のテープ張りが各地区で行わ
れました。住民の皆さんがこ
うした取組みにふれることに
よって、防災意識の向上につ
ながればと思います。

台風23号では、自然をあな
どつてはいけなことを痛感
しました。一方、ボランティア
の皆さんの温もりも感じまし
た。この経験を後世に伝え
地域防災の基盤をしっかりと固
めていきたいと思っています。

笹本 今後の防災・減災対策
として、台風23号の経験をプ
ラスに変えることが必要です。
そのためには、家族での話し
合いなどを通して一人ひとり
が災害に関する知識を高めな
ければいけません。また、日
ごろから地域住民が楽しく集
まる状況を作っておくことが
重要です。それがいざという
時に必ず役立ちます。

災害文化の伝承に特殊なこ
とは必要ありません。みんな
が豊かに生きていくためには
どうしたよいかという視点
で、防災についてお互いに話
し合い、それを未来にメッセー
ジとして送ればよいのです。



小坂小学校では、「洪水を防ぐためにできること」「ありがとうボランティア」など学年ごとにテーマを設けて防災授業が行われた



防災授業を通して感じたことを発表する児童

教訓を次代に語り伝える 市内全校でメモリアルデー防災授業

台風23号の教訓を次代を担う子どもたちに伝えていこうと、10月19日から23日にかけて、市内のすべての幼稚園と小中学校で「メモリアルデー防災授業」が行われました。

市教育委員会が本授業の実施に向けて作成した防災教育資料を活用して、防災授業や全校集会、防災訓練などが行われ、子どもたちは、防災・減災についての認識を新たにするとともに、生命の尊さや助け合いの大切さなどを学びました。

なお、この取組みは、来年度以降も防災教育の一環として継続実施される予定です。

『台風23号に係る
防災教育資料』

市内全学校で台風23号の被災体験を踏まえた防災学習を進めるため、市教育委員会が作成した学習教材です。

市や県の職員、小中学校教諭13人で組織された防災資料作成委員会が編集作業を行い、豊岡および豊岡円山川の両ロータリークラブの資金援助を得て、本年10月に発行しました。

地域の実情や子どもたちの成長発達段階などに応じて授業が行えるように、「被害状況」「自然・環境」「防災」「心の支えあい」の4つのテーマを柱にして、防災教育に関するさまざまな情報が収められています。



ポプラのように
力強く生き抜こう

台風で流された
幹の新芽を植樹

新田小学校

新田小学校では、台風23号による激流によって流されたポプラの木を再びよみがえらせようと、10月20日のメモリアルデーに新芽の挿し木を行いました。

同校には、学校のシンボルともいえる高さ約30メートル、樹齢約50年のポプラの木がありました。昨年9月、強風によって倒れたため、学校近くの造園業者に預けていました。その後、台風23号が襲来し、円山川の決壊により、その幹は押し流されてしまい行方知れず。ところが、水が引いて数日後、約2・5キロメートル離れた六方田んぼで根を張って立っていました。

防災授業で感じたこと 思ったこと

「もの」と「こころ」の準備の大切さを学んだ



三江小5年
もりもと たけし 剛史くん
森本

去年の10月20日、あの大型台風23号がぼくたちのまち「豊岡市」に上陸し、大きな傷跡を残しました。ぼくの家は水に浸かなかつたけど、すごい被害を受けた地区もありました。

あの時一番感じたことは、懐中電灯、食料、水分など大切な物を持っていくために、非常持ち出し袋をいつでも用意しておかなければならないということでした。今回の学習で袋の中に入れておくといいものをみんな考えてとても参考になったし、帰ってすぐに用意しようと思いました。

また、災害の時、電話で「171」を押すと災害用伝言ダイヤルにかかることもわかりました。家に帰り「171」と電話番号を押すと災害伝言ダイヤルにしっかりかかりました。

この学習をして、今後もし災害にあった時のために、非常持ち出し袋など「もの」の準備とともに、家族でしっかり話し合っておくなど「こころ」の準備をしておくことの大切さを学びました。

ありがとう ボランティアの皆さん



小坂小4年
かわみ ゆかり 華理さん
川見

昨年の10月20日、私の家や学校が水に浸かり、泥だらけになってしまいました。

水が引いた後、学校には多くのボランティアの方が来られ、私たちが勉強できるようにきれいにしてくださいました。中には遠いところから来ている人もあったそうです。

その時、私は自分の家が大変で、片づけをしていると、私の宝物が失われている、とても悲しかったです。

しかし、おばあちゃんやおじいちゃんが来てくれたり、ボランティアの方が来てくれたりしたお陰で、家も学校もとてもきれいになりました。

それに、「友達は大丈夫かな」と思っていたので、早く学校が開かれると聞いてほっとしました。

家や学校はこんなにひどいことになったのは悲しかったけれど、みんなできれいにしてくれたお陰で、友達と早く会える日が来てとてもうれしかったです。

この台風のことは一生忘れません。

防災授業を行う理由がわかった



日高小6年
かわぶち かなえ 佳苗さん
河本

10月20日メモリアルデー授業を行うことを先生から聞きました。「つらいかな」と先生に聞かれ、「いや。大丈夫だよ」と答えました。でも、あれからは台風が来ると聞いたなら、いつもより天気予報を意識してしまいます。だから、やっぱり大丈夫じゃないかも知れません。授業の朝も、去年のことが浮かんでしまいました。防災無線から流れてくる放送の後すぐ、水が家の中に浸み込んできました。それから後のことも次々思い出してしまいます。それで、授業前、先生に「あんまり聞かなくてえよ」と伝えました。

授業では、あの時のすごい被害がパソコンから映し出され、どうしてこんな勉強をするんだろうと思いました。でも学習を進めていってわかってきました。大変な時でも人の優しさが人を助けてくれること、次の世代に災害を防いだり被害を少なくしたりする方法を考えていけること、こんな大切なことのために記憶に残しておかなければならないことを。私たちは、生きる力

にするために、この記憶を伝えていかななくてはなりません。

るかのような姿で幹が見つけられました。再び業者が回収し保管していると、地域の人々に災害に負けない勇気を与えるかのように、今年4月、その幹から新芽が吹き出てきました。

メモリアルデーでは、全校集会で昨年の水害の話聞いた後、6年生15人が代表して、新芽29本を6個のプランターに挿し木をし、このポプラのように力強く生きていくことを誓い合いました。

なお、順調に育てば、来春には校庭に移植される予定です。



ポプラの再生を願い、新芽を植え付ける児童